

令和5年度特別支援教育に関する実践研究充実事業
(その他政策上の課題の改善のための調査研究)
成果報告書

受託団体名
学校法人 日本聾話学校

1. 研究のテーマ

人工内耳装用児に関する言語活動の充実に関する調査研究

2. 研究の名称

人工内耳装用児に関する言語活動の充実に関する調査研究 聴覚主導の教育による言葉（母語）習得のための取り組みの検証

3. 研究代表者

氏 名	所 属	役 職
鈴木実	日本聾話学校	校長

4. 事業の実績

(1) 研究の目的・目標

研究の目的
聴覚主導の教育（以下NAOA）は、最早期から聴覚を最大限に活用するための適切なオーディオロジー上のケアをしながら、ことばと心を訓練によらず、自然で豊かな関わりを通して育てる教育の取り組みである。この教育は、子どもが本来持つ力を十分に引き出し、社会に適応するのに必要な音声による言語・コミュニケーション能力を獲得することを目的とする。本調査研究によって、人工内耳装用児（以下CI装用児）に対するNAOAの有用性を確認し、発信することで、聴覚活用の取り組みの輪を広げ、全国に住むより多くのCI装用児とその家族が聴覚を十分に生かした教育を選択できるようにしていきたい。また、海外でインクルーシブ教育を先進的に行っている学校を視察し、聴覚障害の専門教育におけるインクルーシブな環境下での教育の効果と、インクルーシブ環境を整えるための必要についての調査を行う。
研究の目標
NAOAを通じて成長した児童の成長の過程を調査する 個別の指導計画を主に活用し、CI装用児の成長の道筋を明らかにする 個別の指導計画を分析し、生活年齢や言語的成長の各発達段階において関わりやコミュニケーションの力の成長の様子を評価するキーワードを収集・分析することで、NAOAの取り組みの中での成長発達の様子を明らかにする 海外の取り組み事例からNAOAの有効性を確認する CI装用児に対する先進的なNAOAの事例を調査し、その有効性を確認する インクルーシブな環境下においてNAOAがより有効となることを確認する

（２）取組内容

以下の研究を通して、NAOAの中で人工内耳装用児が成長する様子やNAOAの取り組み内容についての検証、インクルーシブな教育環境を作るための視察と考察を行った。

１）NAOAを通じて成長した児童の成長の過程を調査する

- ① 成長を記録した映像を活用し、CI装用児の成長の道筋を、補聴器装用児（以下HA装用児）の成長の様子との比較の中で検証した。
- ② 個別の指導計画を分析し、生活年齢や言語的成長の各発達段階におけるコミュニケーション力や言語力の成長の様子についての記述と、その成長に向けた教師の関わりについての記述を収集・分析することで、NAOAの取り組みの中での成長発達の様子と教師の関わりを検証した。
- ③ 各発達段階の中での生徒の成長と教師の関わりについて、事例を用いた分析を行った。

２）海外の取り組み事例からNAOAの有効性を確認した。

視察先として、シンガポールにあるカノシアンスクール（聾学校）を訪問した。カノシアンスクールは、同じ敷地内にあるカノッサカトリック小学校と提携し、聾学校に所属しながら日常的に普通小学校の教室で学び、さらに必要な支援を聾学校で受けることができる教育環境を整えており、高い専門性を求められる聴覚障がい児教育におけるインクルーシブな環境が整った学校であることから、この学校での取り組み内容や教育的効果について視察を行った。

（３）事業の実施日程

実施時期	実施内容
令和５年４月	研究内容の詳細についての検討
令和５年５月	各章の分析方法、指標についての検討
令和５年６月	２章のためのVTR分析
令和５年７月	３章のための成長の記録（個別の学習計画）の分析
令和５年８月	シンガポール視察
令和５年９月	VTR分析、成長の記録の分析のまとめ、海外視察のまとめ
令和５年１０月	VTR分析、成長の記録の分析のまとめ、事例VTRの分析
令和５年１１月	VTR分析、成長の記録、事例VTRの分析のまとめ
令和５年１２月	各省の分析のまとめ、全体のまとめ
令和６年１月	全文の確認、校正作業
令和６年２月	全文の確認、校正作業
令和６年３月	全文の確認、校正作業、成果物の印刷

(4) 研究の成果

本事業において、人工内耳装用児の言語発達について、またインクルーシブな教育環境を構築するために必要なことについての研究を行った。

1) CI装用児の言語発達について、以下のことが確認できた。(根拠となるデータについては成果報告書を参照 https://nrg.ac.jp/uploads/2024/06/monka_kenkyu2023_ver3.pdf)

- ・ 重度難聴の聴覚障がいがあるため、言語発達の初期段階において人工内耳の使用が安定するまでは、言語発達の状況は緩やかである
- ・ 人工内耳の装用状況が安定し、聴覚活用が進むと、順調な言語発達をするようになり、小学部低学年になる頃にはHA装用児と比較して同程度の発達の状況にまで到達する。
- ・ 人工内耳装用児も補聴器装用児も聴覚を活用しての言語発達の順序に大きな違いは見られない。その発達の順序は、
 - ① ことばをことばとして聴くことが出来る補聴の確保。
 - ② 他者の認知と関わりの開始／日常生活の中での音への気づき。
 - ③ 関わりの積み重ねによるインタラクションに向かう態度の形成と成長。
 - ④ 無意識の発声から意図的な発声、ジャーゴン期を経て2語文以上の発話へ。
 - ⑤ 聴いて理解することばの成長 生活言語から学習言語の理解へ。
 - ⑥ 自己維持、方向付け、報告などの低次の言語機能から、想像、投影などの高度な言語機能、そして自己の内面を語ることばを使うようにと成長する。
- ・ 最早期から聴覚を活用し、適切な関わりの中で成長することにより、補聴器装用児であっても人工内耳装用児であっても、小学部低学年になるころには他者とのコミュニケーションに必要な基本的な姿勢が身につく、また多くのケースでは生活に必要な一定程度の言語力が身につく。
- ・ 発音の音素・音韻的部分のみを取り出した訓練は行っていないが、多くのケースでことばが伝わるために必要な発語の明瞭性は身につけている。聴覚を徹底活用することで、リズムやイントネーション等の要素が自然なものとなり、それが自然な発話と伝わりやすさに繋がっているといえる。
- ・ 聴覚を十分に活用できる環境の中で、そのために必要な支援を受けることで、聴覚障がい児であっても、健聴児と同じ道筋をたどって成長していくことができる。前提となるのは、補聴器または人工内耳のいずれを装用するにしても、ことばをことばとして聴きとれるだけの徹底した調整をした補聴をすること。

2) インクルーシブな教育環境を構築するために必要なことについて。

- ・ 一般教育の中で聴覚障がい児が十分に適応するために必要なこととして、

- ① 日常的かつ連続的に聴覚障がい児と健聴児との交流が行われている。
- ② 聴覚障がい児への個別的な配慮と補聴のケアやサポートが保障されている。

という二点が重要であることが確認された。

- ・ 今後聴覚障がい児についてのインクルーシブ教育を推進するにあたり、聴覚障がい教育の知識と経験を有する教員によるサポート体制の整備が必要であることが示唆された。

(5) 研究の課題と今後の方策

- ・聴覚障がい児の言語発達について、より客観的な指標に基づいた評価、検証を行なえるようになることが課題。そのために指標の検討を行う。
- ・聴覚障がい児が、その子が本来持つ力を十分に伸ばすことが出来るインクルーシブな教育環境を整えるために必要なサポートの在り方をより具体的に示す必要がある。そのためには、インクルーシブな教育を実践している先行例からさらに多くを学び、それを一般化して広く役立てられるようまとめる必要がある。

5. 研究体制

担当者氏名	所属・役職等	具体的な役割
鈴木実	日本聾話学校 校長	研究代表者
瀬底正嗣	日本聾話学校 副校長	研究の総括、実践研究の指導・立案・助言、報告書作成
佐々木勝	児童発達支援センターライシャワ・クレーマ学園 園長	実践研究の指導・助言
山中順子	日本聾話学校 幼稚部主任	実践研究の指導・助言
吉田美由紀	日本聾話学校 小学部主任	実践研究の指導・助言
木内秀紀	日本聾話学校 中学部主任	実践研究の指導・助言
長谷川 寿登	日本聾話学校 オーディオロジ一部主任 言語聴覚士	実践研究の指導・助言
岩淵良也	児童発達支援センターライシャワ・クレーマ学園言語聴覚士	調査結果の分析、実践研究の立案・分析・考察、報告書作成
相島悟	日本聾話学校 教諭	調査結果の分析・分析・考察、報告書作成
大林志保	日本聾話学校 教諭	調査結果の分析・分析・考察、報告書作成
大西輝	日本聾話学校 教諭	調査結果の分析・分析・考察、報告書作成
小西慎一	日本聾話学校 言語聴覚士	調査結果の分析・分析・考察、報告書作成

6. 研究協力機関・校の一覧

(ふりがな) 学校名	障害種	具体的な役割
にっぽんろうわがっこう 日本聾話学校	聴覚障害	人工内耳装用児に対する聴覚を活用した聴覚障害児教育の実践